様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００６１２

研究課題名（和文）近現代日本語「基本語彙」史の記述に向けた新聞・和語動詞の「叙述語」化の研究

研究課題名（英文）A diachronic study on the formation of "descriptive words" in newspapers : towards a history of the basic vocabulary of modern and contemporary Japanese

研究代表者
金　愛蘭（KIM, Eran）

日本大学・文理学部・准教授

研究者番号：９０４６６２２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，近現代の書きことばの「基本語彙」史のなかで，文章の叙述面を支える「叙述語」の成立に注目し，とりわけ20世紀半ば以降の新聞における和語動詞の叙述語化について通時的な調査研究を行い，以下の成果を得た。①研究代表者が先に構築した『毎日新聞経年コーパス』を増補し，精度の高い統計的分析に耐える通時コーパスとして整備した。②叙述語化した語を通時コーパスから発見・抽出するための方法論を開発した。③叙述語化した可能性の高い和語動詞を上記コーパスから抽出し，「話す，言う，述べる，語る」等の談話引用動詞をはじめ，いくつかの動詞についてそれぞれの叙述語化の過程を具体的に記述した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は，従来，変化しないことがその特徴であると考えられがちであった基本語彙を，時代とともに変化するものととらえ，その変化・形成の歴史を個別の語の叙述語化という現象によって具体的に把握・記述する「基本語彙史」という新たな研究領域を語彙論にもたらし得るという点で，学術的な意義がある。とくに，本研究の調査によって，少なからぬ和語動詞が現代の新聞において叙述語化していることが確認されたことは，日本語の書きことばの基本語彙が漢語中心から再び和語中心に回帰する可能性をも示すものとして，基本語彙の研究にも大きなインパクトを与えるものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the formation of "descriptive words" that support the descriptive aspect of texts, which are positioned in the history of the basic vocabulary of modern and contemporary written language. In particular, we conducted a diachronic research on the formation of descriptive words by Japanese original verbs in newspapers since the mid-20th century, and obtained the following results. 1) The Mainichi Shimbun chronological corpus, which was previously constructed by the principal investigator, was supplemented and made into a diachronic corpus that can withstand high-precision statistical analysis. 2) A methodology was developed for finding and extracting descriptive words from the diachronic corpus. 3) Japanese original verbs that are likely to have changed into descriptive words were extracted from the above corpus, and the process of each change was specifically described for several verbs, including discourse citation verbs such as "hanasu, iu, noberu, and kataru".

研究分野：日本語学

キーワード：語彙・意味　基本語彙　基本語化　語彙史　叙述語　通時コーパス　新聞　和語動詞

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

基本語彙とは，その言語の語彙の中核をなす語群であり，語彙を集合ととらえるならその基幹部に，体系ととらえるならその基本レベルに位置する語群である。日本語の基本語彙の研究は，国立国語研究所の一連の語彙調査およびそれに基づく計量語彙論的研究によって主導されてきた。それは，「基本語彙とは何か」という概念規定から始まって，その計量的な選定法を考案・高度化し，それにより選定された基本語彙の評価にまで及ぶものであったが，そこで想定された基本語彙は，「基本度」という尺度からレベル分けされることはあるものの，基本的には等質のものとされ，その内実（質的な相違に基づく分類）が問題とされることはなかった。また，書きことばの基本語彙の選定を目的とする共時的な調査・研究であったため，基本語彙も時代とともに変化するということがあまり考慮されなかった。

このうち，基本語彙の質的分類については，寿岳章子・林四郎・田中章夫といった個人の研究によって仮説的に検討された。とくに，寿岳は「(1)骨組み語・(2)テーマ語・(3)叙述語」という分類を提案し，それぞれ，(1)日本語で書いたり話したりする以上絶対に必要な語，(2)言語資料の内容によってその出現・使用が規定される語，(3)言語資料の叙述方法に関連して用いられる語，とした。この分類は，後に宮島達夫が評価したように「語彙論一般にとって基本的な概念」といえるものだが，叙述語の概念規定などになお曖昧なところを残しており，基本語彙分類の定説となることはなかった。

一方，基本語彙の変化については，宮島達夫などにより，書きことばの基本語彙に，明治時代には抽象名詞の漢語が，大正・昭和時代には具体名詞の外来語が，そして昭和後半から平成にかけては外来語の抽象名詞が進出したというような，近代以降のマクロな変化の動向は指摘されているものの，詳しいことはわかっていない。こうしたマクロな変化は，個々の語が新たに基本語彙の仲間入りをする「基本語化」と，逆に基本語彙から外れる「周辺語化」というミクロな変化をその内実とするが，近現代日本語の大規模な通時コーパスが整備されていない状況では，個別の語の使用の変化動向を明らかにすることはきわめて困難であり，当然，基本語化・周辺語化した語を特定することも困難であった。

しかし，近年，通時的なコーパスを構築・利用して，個別の語の「基本語化」現象を実証的に把握・記述しようとする研究が行われ始めた。一つは，本研究の代表者・金愛蘭による「20 世紀後半の新聞における外来語の基本語化」の研究であり，いま一つは，田中牧郎による「明治後期から大正期の総合雑誌における漢語の基本語化」の研究である。金は，「トラブル」「ケース」「チェック」など抽象的な意味を表す外来語が，20 世紀後半の新聞においてその基本語彙の仲間入りをする現象を見出し，これを「基本語化」と名付けた上で，それがこの時代における新聞文章の概略化によるものとの見方を示した。田中も，近代の文章語の成立過程で同様の基本語化が「活躍」「展開」「表現」といった漢語を中心に生じていたことを雑誌『太陽』コーパスの調査によって明らかにし，そうした漢語の基本語化が近代文章語の成立期における文章の合理化と関連するとの見方を示した。

金と田中の研究は，書きことばの基本語彙の中に寿岳の言う「叙述語」に相当する部分があり，それが文章の叙述方法の変容によって，新たな外来語や漢語を仲間入り（基本語化）させながら変化している，という可能性を示すものである。このことから，以下のような研究課題が設定できる。すなわち，近現代の書きことばの「基本語彙」史のなかで，どのような語が叙述語として基本語化したのか，また，そうした基本語化（叙述語化）をもたらした要因は何か，という問いである。

２．研究の目的

本研究は，上の問いのうち，現代（20 世紀半ば以降）の新聞における和語動詞の叙述語化に焦点を当て，どのような和語動詞がどのように叙述語化したのかを明らかにすることによって，現代新聞の基本語化の中核に和語動詞の叙述語化があることを検証しようとするものである。

新聞の和語動詞に注目するのは，研究代表者・金が平成 26～28 年度に組織した科学研究費助成事業基盤研究（C）「近現代日本語彙における『基本語化』現象の記述と類型化」（研究代表者：金愛蘭・26370529）において，データとした『毎日新聞経年コーパス』（後述）から一定の条件を定めて 20 世紀後半に叙述語化した（可能性のある）102 語を取り出したところ，それらの語種の内訳が，和語 46，漢語 37，外来語 2，混種語 17 となり，現代の新聞が（漢語や外来語以上に）和語，なかでも以下のような和語動詞を新たな叙述語に加えていることが推測される結果となったからである。

話す，次ぐ，問う，繋がる，広がる，起きる，取り組む，戻る，読む，振り返る，抱える，受け入れる，支える，経る，戦う，生きる，伸ばす，盛り込む，終える，教える，広げる，高める，促す，増す，定める，隠す，陥る，受け止める，踏まえる

３．研究の方法

本研究では，上記の研究目的を達成するために，(1) 上述の『毎日新聞経年コーパス』をさら

に増補してデータとし，(2) そこから，独自に開発した統計手法を使って基本語化した可能性のある語を抜き出し，(3) そのうちの和語動詞について用例データベースを作成した上で，(4) それをもとに各和語動詞の叙述語化の過程を明らかにする，という方法を採る。以下，(1) ～ (4) の詳細を記す。

(1)『毎日新聞経年コーパス』の増補

このコーパスは，研究代表者・金が，1950 年から 2010 年までの『毎日新聞』からほぼ 10 年おきに，毎月 3 日分（5 日・15 日・25 日），各年 36 日分の朝刊（全国版）全紙面の記事（見出し・本文）を，1950～80 年は『縮刷版』からテキスト形式で入力し，1991～2010 年は『ＣＤ－毎日新聞データ集』から抽出して，作成したものである。本研究では，ページ数が少ないためにデータ量の小さい 1950 年・1960 年について，それぞれ約 220 万字・約 80 万字分のデータを追加して約 300 万字とし，他の年のデータ量に近づけて，統計的分析の精度を向上させる。

(2) 基本語化した可能性のある語の抽出

増補した『毎日新聞経年コーパス』について語彙調査を行い，その結果を統計的に解析して基本語化した可能性のある語を抽出する。この段階で，抽出された語に和語動詞が多いことを確認する。抽出に用いる統計手法には，研究分担者・石井の考案した「対数化特化係数散布度」を用いる。

(3) 和語動詞の用例データベースの作成

抽出された和語動詞について，それぞれの用例を『毎日新聞経年コーパス』から検索・付与し，各語の用例データベースを作成する。

(4) 和語動詞の叙述語化の記述

抽出した和語動詞について，上記の用例データベースをもとに，それが叙述語として成立しているかを，「叙述の型」を獲得しているかという点から検討する。叙述の型とは，文章の述べ方に規定される叙述語がその述べ方としてもつ特定の型（パターン）をさす。こうした叙述の型を獲得していれば，その動詞は基本語彙の中に叙述語として加わった（＝叙述語化した）とみなすことができる。

４．研究成果

(1)『毎日新聞経年コーパス』の増補

当初は，データ量の小さい 1950 年・1960 年について，それぞれ約 220 万字・約 80 万字分のデータを追加して約 300 万字とすることを計画していたが，予算額縮小と入力単価の高騰により，1960 年分の増補は断念し，1950 年のみを 200 万字以上に増補する作業を行った。1950 年は紙面数が極端に少ないが（平日 2 ページ，休・祝日 4 ページ），コーパスに採録する日を毎月 3 日分から 9 日分（毎月 2 日・5 日・8 日・12 日・15 日・18 日・22 日・25 日・28 日）に増やした。その結果，表１に示すように，各年のデータ量がすべて 200 万字以上となり，より精度の高い統計的分析に耐え得る通時コーパスを構築することができた。

［表１］『毎日新聞経年コーパス』（増補版）各年の文字数（空白は除く）

1950 年	1960 年	1970 年	1980 年	1991 年	2000 年	2010 年	計
2,268,586	2,208,063	3,151,270	3,243,305	3,146,194	3,463,566	2,961,867	20,442,851

表２は，このコーパスを，国立国語研究所の形態素解析ツール『Web 茶まめ』を利用して「短単位」に解析した場合の語彙量である。ただし，1950 年のみ「旧仮名口語」辞書で解析し，他は「現代語」辞書で解析した。1950 年の新聞には，促音・拗音が大文字で表記されている箇所が多く，「現代語」辞書での解析がうまくいかないためである。なお，この問題については，漢字の字体や仮名遣いの違いも含めて，今後の修正方針を検討した。

［表２］『毎日新聞経年コーパス』（増補版）の語彙量（短単位）

	1950 年	1960 年	1970 年	1980 年	1991 年	2000 年	2010 年	計
延　べ	896,768	812,901	1,141,752	1,184,980	1,203,893	1,321,623	1,158,828	7,720,745
異なり	32,801	33,141	37,422	37,812	35,527	39,412	36,183	76,206

(2) 基本語化した可能性のある語の抽出

書きことばの基本語彙を「話題の違いによる層別を施したコーパスにおいて，使用率が大きく，かつ，均等度が大きい語の集合」，基本語化した語を「各時点とも同じ層別を施した通時コーパスにおいて，使用率及び均等度が顕著に増加している語」と規定して，『毎日新聞経年コーパス』から基本語化した可能性のある語を取り出した。その際，均等度（語彙散布度）の測定には Gries(2008)が提案する DP（deviation of proportions）を採用した（計画段階では，研究分担者・石井の考案した「対数化特化係数散布度」を用いる予定であったが，種々の試行錯誤の後 DP に変更した）。いま表３のような語彙表があるとき，語Wの DP は，ある層Ｓｉでの，語Wの構成比ｆｉ/F（実測比率）と語彙Ｖの構成比ｔｉ/T（期待比率）との偏差の絶対値｜ｆｉ/F－ｔｉ/T｜を求め，それらの総和を２で割った値（[Σ｜ｆｉ/F－ｔｉ/T｜]/2）である。DP の値は 0 以上１以下の範囲をとり，また，使用率・均等度（語彙散布度）の増減の測定には，平均変化率（(変

化後の値－変化前の値）／変化前の値）の幾何平均）を採用した。具体的には，コーパス（1960 年～2010 年）のすべての観測年に現れる 11,831 語のうち，

①1960 年に，全 25991 語中の使用率順上位 10%までの 2599 語（実際には使用頻度 30 以上の 2608 語，累積使用率上位 77.6%）の中になく，かつ，

②2010 年に，全 29512 語中の使用率順上位 10%までの 2951 語（実際には使用頻度 35 以上の 2933 語，累積使用率上位 79.9%）の中にあり，かつ，

③1960 年から 2010 年までの使用率の平均変化率が 1.1 以上であり，かつ，

④2010 年に，DP の昇順上位 2000 語（実際には DP0.316 未満の 2013 語）の中にあり，かつ，

⑤1960 年から 2010 年までの DP の平均変化率が 0.95 以下の 149 語から，

⑥固有名詞 36 語，記号 7 種を除いた 106 語

を，基本語化した語の候補とした。それらを語種・品詞別にまとめると，表４のようになる。和語動詞は，漢語名詞に比べれば少ないが，和語名詞よりも多く，新聞における基本語化の中核的な位置を占めていると言える。

［表３］語彙表における語Wと語彙Vの頻度

語＼層	S_1	S_2	…	S_n	計
⋮					⋮
W	f_1	f_2	…	f_n	F
V	t_1	t_2	…	t_n	T

［表４］基本語化・非基本語化した候補の語類（カッコ内は DP 平均変化率の順位）

和語名詞	【10 語】取り組み(11)，神(34)，若手(40)，床(58)，光(61)，島(66)，生まれ(77)，思い(97)，笑顔(98)，終わり(104)
和語動詞	【16 語】明かす(1)，担う(3)，繋げる(12)，込める(17)，受け止める(22)，隠す(25)，下がる(31)，探る(37)，増す(46)，支える(53)，振り返る(54)，崩す(72)，異なる(79)，築く(85)，止める(95)，取り組む(105)
和語形状詞	【1 語】前向き(13)
和語形容詞	【1 語】甘い(68)
和語副詞	【1 語】確り(67)
漢語名詞	【24 語】名(8)，文科(14)，職(15)，囲碁(16)，体調(20)，複数(21)，普段(26)，前線(29)，将棋(32)，詳細(35)，人生(36)，近年(48)，週(50)，未来(55)，直後(69)，名人(70)，疑惑(75)，兄弟(82)，現役(83)，世紀(86)，冷静(88)，同級(89)，瞬間(94)，外部(100)
漢語名詞（サ変可能）	【26 語】明言(6)，流通(7)，交流(10)，選択(30)，位置(33)，対応(38)，反応(41)，合格(42)，移動(45)，交代(47)，受賞(49)，観戦(52)，食事(56)，広報(59)，変動(60)，分析(63)，手術(73)，優先(76)，表示(84)，撮影(87)，和(92)，認識(93)，公表(96)，貢献(99)，限定(102)，感謝(106)
漢語代名詞	【1 語】僕(74)
漢語形状詞	【1 語】残念(71)
漢語接頭辞	【1 語】多(103)
漢語接尾辞	【6 語】事(57)，弾(64)，同士(65)，光(80)，誌(81)，児(101)
外来語名詞	【14 語】ネット(2)，スーパー(5)，ビデオ(9)，メッセージ(18)，レベル(19)，ファン(23)，ランク(28)，バランス(39)，メンバー(43)，カード(44)，イン(51)，タイプ(62)，ハウス(78)，テーマ(90)
外来語名詞（サ変可能）	【3 語】イメージ(4)，インタビュー(24)，コメント(27)
混種語動詞	【1 語】頑張る(91)

（3）和語動詞の用例データベースの作成（略）

（4）和語動詞の叙述語化の記述

（2）で得られた和語動詞について，（3）で作成した用例データベースをもとに，それぞれの基本語化の過程を記述し，そこに上述した「叙述の型」の獲得過程が見出せるか検討した。一例として，基本語化の度合いが最も大きい（＝DP の平均変化率が最も小さい）と考えられる和語動詞「明かす」についての検討を記す。表５に，「明かす」の各年・各層での期待値偏差（期待比率と実測比率の絶対差）をまとめた（参考までに各年・各層の使用頻度も添えた）。その上で，「明かす」のコーパスにおける用例を検討すると，全 91 例中 85 例が用例(a)(b)のような《明らかにする，明るみに出す，はっきりさせる，打ち明ける》意であった。

(a) 名前をあかさないで運動資金にと金一封を置いて行く人が毎日のように出てくるとのことで（略）（1960 年〈国際〉）

(b) 目黒一法大でフッカー，フランカーなどで鳴らした幡鎌孝彦監督（四○）は「勇気が要ったが，従来の数と量をこなすスパルタ練習をこのチームからやめた」と明かす。（1991 年〈スポーツ〉）

その《明らかにする内容》とそれに付属する文法形式が明示された 71 例について，文法形式ごとにその使用量の推移をまとめたのが表６である。これを見ると，まず，1960 年・70 年・80 年は，1960 年の〈スポーツ〉の１例を除いて，すべて～ヲ（ヲ格補語）である。1991 年になって，～コトヲ（コト節），～ト（ト節）も加わるが，まだ多くない。2000 年になると用例数は倍増するが，増えたのは～ヲ（ヲ格補語）と～ト（ト節）で，～コトヲ（コト節）は増えていない。2010 年にはさらに増え，～コトヲ（コト節）も増えるが，～ト（ト節）が使用頻度・出現紙面（層）のいずれにおいても最も多くなる。要するに，1960 年以降の 50 年間で，おおよそ，～ヲ（ヲ格補語）から～コトヲ（コト節），～ト（ト節）に拡大したが，とくに～ト（ト節）の使用の増加が「明かす」の基本語化に大きく関与している（新聞の叙述において「～と明かす」という叙述の型が一般化してきた）ことが推測されるのである。

［表５］「明かす」の使用頻度・期待値偏差・DP の推移

年	使用頻度						期待値偏差						DP
	一面	国際	経済	家庭	スポーツ	社会	一面	国際	経済	家庭	スポーツ	社会	
1960		2			1		0.238	0.591	0.157	0.127	0.135	0.204	0.726
1970						3	0.152	0.051	0.239	0.099	0.166	0.707	0.707
1980	3	4	2			3	0.109	0.189	0.072	0.115	0.160	0.049	0.347
1991		3			1	5	0.140	0.195	0.137	0.083	0.064	0.230	0.424
2000	4	5		1	4	7	0.113	0.083	0.169	0.058	0.094	0.124	0.320
2010	6	4	5	5	15	8	0.069	0.001	0.041	0.037	0.003	0.006	0.078

［表６］「明かす」の《明らかにする内容》を表す文法形式の量的推移

年	層（紙面）	～ヲ	～コトヲ	～ト	～ト～ヲ	計
1960	国際	1				2
	スポーツ				1	
1970	社会	1				1
1980	一面					4
	国際	1				
	経済	2				
	社会	1				
1991	国際	1				7
	スポーツ			1		
	社会	1	2	1	1	
2000	一面	2	1		1	16
	国際			4		
	家庭	1				
	スポーツ	1		1		
	社会	3		2		
2010	一面			6		41
	国際		1	2		
	経済	3		2		
	家庭	3	1	1		
	スポーツ	3	7	3	2	
	社会	1	2	3	1	
計		25	14	26	6	71

このほかにも，対数化特化係数散布度による測定では最も基本語化の度合いが大きかった和語動詞「話す」は，『毎日新聞経年コーパス』の用例を見る限り，「終了後，記者会見した大沢村長は『賛否両論を踏まえて，女児側との話し合いの方向性を見いだしていきたい』と話した。」のように，「談話引用用法」（記者が関係者・識者等の談話を読者に伝達する目的で，発話された（単なる音声や言葉ではなく）まとまりをもった内容をト節として引用する用法，伝達の相手はニ格で明示されない）において 1991 年以降その使用を大きく増やしており，「話す」の叙述語化がこの用法を叙述の型として進行したことが推測される。「話す」による叙述の型の獲得は，類義の談話引用動詞「言う」「述べる」「語る」との関係とともに，新聞の叙述の変化と深くかかわっている可能性があり，他の和語動詞についても，こうした点を十分に考慮しつつ，今後，同様の調査・分析を継続していく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 金　愛蘭	４．巻 33-1
２．論文標題 現代「語彙史」研究のためのコーパスと統計―『毎日新聞経年コーパス』による語の増減傾向の分析―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 計量国語学	６．最初と最後の頁 pp.233-248
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石井正彦	４．巻 34
２．論文標題 現代新聞語彙における“基本語化”と“非基本語化”：使用率・均等度の平均変化率を用いた量的検討	５．発行年 2022年
３．雑誌名 阪大日本語研究	６．最初と最後の頁 pp.1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石井正彦	４．巻 13
２．論文標題 新聞社説の叙述系基本語彙	５．発行年 2021年
３．雑誌名 現代日本語研究	６．最初と最後の頁 pp.65-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 金　愛蘭	４．巻 39-2
２．論文標題 特集コーパスによる語史・現代語誌　クレーム（苦情・文句）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本語学	６．最初と最後の頁 pp.72-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石井正彦	4．巻 12
2．論文標題 語彙調査における高頻度語の分離に関する計量的検討	5．発行年 2020年
3．雑誌名 現代日本語研究	6．最初と最後の頁 pp.54-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/78786	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石井正彦	4．巻 38-12
2．論文標題 語彙調査の裏側－基本語彙から周辺語彙へ－	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本語学	6．最初と最後の頁 pp.12-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金　愛蘭	4．巻 38
2．論文標題 新聞における外来語「ルール」の叙述基本語化	5．発行年 2019年
3．雑誌名 国語語彙史の研究	6．最初と最後の頁 pp.362-378
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石井正彦	4．巻 11
2．論文標題 コロケーションの成立と変化に関する事例的検討―新聞「デフレ＋動詞」句の通時的頻度調査から―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 現代日本語研究	6．最初と最後の頁 pp.107-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/73343	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 金　愛蘭
2．発表標題 社会変動の中の日本語研究―学の樹立と展開―
3．学会等名 日本語学会2019年度秋季大会シンポジウム，指定討論者
4．発表年 2019年

1．発表者名 石井正彦
2．発表標題 慣用連語「デフレから脱却する」の成立―連語の単位性をめぐる事例的検討―
3．学会等名 日語語言学国際学術研討会（中国海洋大学）（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

〔図書〕　計6件

1．著者名 石井正彦	4．発行年 2022年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 345
3．書名 斎藤倫明・修徳健編『語彙論と文法論をつなぐ：言語研究の拡がりを見据えて』「語結合の“慣用化”に関する事例的検討：現代新聞における時事的な動詞句の調査から」	

1．著者名 石井正彦	4．発行年 2022年
2．出版社 外語教学与研究出版社（中国・北京）	5．総ページ数 -
3．書名 斎藤倫明編『日本学研究叢書　日本語語彙論』「現代新聞における談話引用動詞“話す”の叙述語化」	

1．著者名 金　愛蘭	4．発行年 2021年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 259
3．書名 金澤裕之・川端元子・森篤嗣編『日本語の乱れか変化か―逸脱表現や新語の発生と許容―』「外来語の氾濫・濫用と叙述語化」	

1．著者名 金　愛蘭	4．発行年 2020年
2．出版社 朝倉書店	5．総ページ数 145
3．書名 小椋秀樹編『コーパスで学ぶ日本語学　日本語の語彙・表記』「第4章　語種」	

1．著者名 石井正彦	4．発行年 2019年
2．出版社 大阪大学出版会	5．総ページ数 388
3．書名 探索的コーパス言語学－データ主導の日本語研究・試論－	

1．著者名 金　愛蘭	4．発行年 2019年
2．出版社 朝倉書店	5．総ページ数 208
3．書名 飛田良文・佐藤武義編『シリーズ日本語の語彙』石井正彦編『第1巻　語彙の原理―先人たちが切り開いた言葉の沃野―』「第5章　語彙の構造」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	石井　正彦 (ISHII Masahiko) (10159676)	大阪大学・文学研究科・教授 (14401)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関